

村山口を中心とする富士信仰関係資料

Research Materials

堀内眞

ここでは、直接、江戸市中に生成した近世富士講とは関わらない富士山をめぐる信仰儀礼の受容や広がりを検討する素材として、文字資料を紹介したい。懺悔文、オノット（御祝詞）、蓬萊山由来、富士講道中歌、垢離次第などである。

南面からの登拝口には、大宮（富士宮市）と村山（同前）があつて表口と称され、おもに東海・関西方面からの富士登拝の拠点となつていた。享祿（一五二八―一三三二）・天文（一五三二―一五五）頃の大宮には、富士参詣の道者が宿泊する坊（道者坊）が三十余坊あつたという〔浅間文書纂〕。それらが近世には六坊に統合され、富士浅間神社（富士本宮、富士山本宮浅間大社）の門前町として大いに賑わつていた。一方、村山は、鎌倉時代末期に頼尊が富士行を創始し、山岳修行者をはじめ、一般登拝者の登山道を開いたと伝える。その後の富士信仰の広がりにより道者の登拝が盛んになると、南面からの登山口にあたるここには多数の道者が訪れた。道者は興法寺に属する修験者が営む宿坊（辻坊・大鏡坊・池西坊など）に泊まり、その案内で登山した。

さて、管見の範囲で確認できた儀礼・行法関係の文書・記録は八表1▽△図1▽の通りである。1は、山もとの村山が「富士道中入口」と

ともに一枚刷りで配布したもので、隣接する富士大宮の道者坊（宮崎倉太郎氏）に残されていた〔富士の歴史〕。「富士道中入口」は、「富士川より村山へ三里余り」、「富士川船場より左」、「岩本より右」、「凡夫川を向こうへ越し」、「左へ入る」、「凡夫川より天間沢村、石原村より村山へ、富士山表口拝所」と記す。すなわち富士川を越えた船場で左に道を取り、岩本で右に折れて、凡夫川を対岸に越して左折、さらに天間沢、石原を経由して村山に到る。懺悔の文を唱え、富士山に対峙する垢離場は、凡夫川が潤井川に合流する立願淵下方の河原と目される。凡夫川を越えた入山瀬には、今泉東泉院が別当を務めた新福地浅間神社があり、富士山の山頂に主軸をあわせた形に本殿・拝殿を建てている。なお、松岡の分岐に「富士山道」道標が建てられたのは宝暦八年（一七五八）のことである。

2は、遠江小笠郡菊川町（菊川市）の下内田の段平尾区に残り、その富士垢離、サンゲサンゲと呼ばれる行事に用いられている。旧暦六月十五日の行事で、そこでサンゲサンゲのオガミをあげた。この時期、田んぼに稲の害虫が寄ってくるので、それを追い払う行事として行ってきたという。段平尾区の総代が中心になって行い、最近「富士松明」とも

表1

資料	時代	場所	出典
1 さんげのもん(懺悔文)	(年未詳)	静岡県富士宮市村山	『富士の歴史』304頁
2 富士垢離	(年未詳)	静岡県菊川市下内田段平尾	『西郊民俗』180号
3 奉唱富士山	天保4年(1833)6月	静岡県掛川市千羽	『静岡県史』資料編15 近世7 149文書
4 大峰山富士山御山渡り(祝詞)	天保8年(1837)3月吉日	静岡県袋井市浅羽町浅名	『浅羽町誌』民俗編 民俗資料4
5 大峰山富士山御祝詞帳	明治30年(1897)9月	静岡県磐田市大原	『福田町誌』資料編 民俗
6 富士山御勤	(年未詳)	静岡県磐田市豊田富里	『富里の民俗』静岡県史民俗調 査報告書11集
7 富士山祝詞之大事	天明3年(1783)正月吉日	愛知県北設楽郡豊根村三沢	『富士講の研究』34~35頁
8 富士山祝詞	平成4年(1992)7月	三重県伊勢市東豊浜町土路	土路区有富士講文書
9 富士蓬莱山由来	平成4年(1992)7月	三重県伊勢市東豊浜町土路	同上
10 富士講道行唄	平成16年(2004)6月吉日	三重県伊勢市東豊浜町土路	同上
11 富士垢離次第	大正13年(1924)7月24日	滋賀県甲賀市甲南町稗谷	稗谷区有文書

※資料番号は下図に対応する。



図1 富士信仰関係資料の分布

よばれるようになってきた〔堀内「段平尾のサンゲサンゲ行事」『西郊民俗』一八〇号、二〇〇二年〕。

サンゲ、サンゲ、ロツコンシヨウジョウ、オシメニハツダイ、コンゴウドウニ、ギョウブノダイニチ、ダイリュウゴンゲン、キミヨウチヨウライ、南無浅間大菩薩

と五〇回繰り返す。本来は一〇八回繰り返すものだという。繰り返しの最後に、

ナムボンテン、タイシヤクシヨウメイ、コンゴウドー

と唱えて行事は終了する。

3は、かつて山口郷（掛川市東部）を開発したとされる榛葉（千羽）氏に由来する千羽（掛川市）の富士講が「唱え奉って」きた祝詞である。富士山名、八葉嶽（八葉の峰、「八峰」という）に対応するもので、表紙裏の張紙に、「月の見ごと二者こんこうしほさつ、ひやうふが岩二者とふこん神、くろ岩二者びじやもん天王」とあり、富士山開山神変大菩薩、両部大日如来、絶頂胎藏八葉曼荼羅に続けて懺悔の文を挿入し、八葉の峰（嶽）、天照皇大神宮（延命地藏大菩薩）、熊野三所大権現（阿弥陀如来）、伊豆大権現（観世音菩薩）^{（秘理）}、白山明利大権現（釈迦牟尼如来）、日吉鹿嶋山王大権現（弥勒菩薩）、鹿嶋大明神（葉師如来）、箱根大権現（文殊菩薩）、三嶋大明神（宝勝如来）までの八葉の神名と本地、山内の神仏、各登山口の浅間大菩薩の名をあげ、最後にもう一度懺悔の文を記している。

旧山名郡の松下や大原、あるいは旧豊田郡の気賀東、匂坂下村に伝わる資料があるが、これらは大峰講と結合したオコリ（御垢離）の行事に使用されてきたものである。

袋井市浅羽町の富里にニッサン（日参）と呼ばれる祓い行事がある。夏の流行病をきっかけに始まったとされる。六月最終日曜日から九月第一日曜日まで日送りにして全戸の輪番制で祈願を掛ける。初日に全戸が

福田町（磐田市）豊浜の海岸に下りてハマゴリ（浜垢離）をする。潮水で身体を清め、法多山（尊永寺、袋井市）などへお参りに出かける。割当ての日には、油山や見付の天神などへ出向く。数日の間に三、四箇所を回るようにする。当番制で五、六人の組で日ごとに回っていく。お経のように「神さん・仏さんのお唱え」（オノツト唱和のこと）をする。九月一日の風祭までに回りきることが決まりだった。なお、浅名天白神社に伝存する4では、後半部が「富士浅間御山渡り」つまり富士浅間の「祝詞」である。大峰山と同じように神仏名を読み上げる形で始まり、各地の浅間大菩薩（神社）を連ねたあとで、村山口の山内に祀られる神仏を掲げ、一嶽から八嶽までの八葉の嶽の本地仏を述べるものである。松下に伝わるオノツト（御祝詞）は、大峰ゴリ（垢離）に用いられるもので、ここでは夏の暑い時期に無病息災を願って海で垢離を搔いて神々に祈願がなされる「浅羽町史」民俗編〕。

福田町にオコリ（御垢離）と呼ばれる行事があった。同町中野では第二次大戦前に病氣平癒を願って村中での祈願が行われていた。この祈願をなすところをオコリバ（御垢離場）といい、太田川の河原に設けられていた。臨終を迎えた者の助命祈願に、近隣者が太田川のおコリバへ出て出て身体を清め、氏神をはじめとする地域の神社に参拝して、大峰山の祝詞を唱えていた。町内では大峰講が盛んで、全国の神仏名の書上げを講中で唱和する集まり（オノツト、御祝詞）と本山である奈良県の大峰山への代参を行っている〔福田町史〕資料編 民俗〕。

オノツトの行事は磐田市大原のものが広く知られている。正・五・九の各月の九日に浅間神社で、「浅間神社」「豊受太神宮」「日本国神代略図」の三幅を掛け、先達に従って当番組の人たちが「神名帳」（御祝詞）を唱和する。この中で用いられる5は、現先達の田中恵氏が筆写したものである。巻頭の「祝詞 大峰」の最初に懺悔の文を記し、後半の「南無静岡浅間大菩薩」からが「富士山御祝詞」に当たる。その中に「南無

一嶽天照皇大神宮」から「南無 八嶽箱根山大権現」までの八葉の嶽を挿入している。祭日には、当番が海岸で浜垢離をして、浜の砂を社殿の周囲に撒いて清める。下大原に住居する現在の先達は、大峰で修行をした前任者から先達職を引き継いでいる〔「浅羽町史」民俗編〕。

七月一日の山開きの日が大原浅間神社の例祭となっている。午前十時頃から拝殿で神事が執行される。先達が「祝詞」を唱え、ほかの人が唱和する。大峰の祝詞と一体のもので、後半部が富士山の祝詞となっている(同前)。このようなオノツト行事は、同町の北側に位置する浅羽町富里の「日参」と同様のものといえる。

磐田市豊田町富里の気賀東、匂坂下組では、ムラシジン(村信心)に「大峰山講行法」のオノツト(6)を唱えて礼拝動行する。同所に隣接する下富にはニッサン(日参)の行事がある。これは、昔、夏に流行病があったときに周辺の神様にお参りしたのがきっかけで始まったとされ、六月の最終日曜日にハマゴリ(浜垢離)と違って潮で身を清める、大峰講の流れをくむ行事である。上気賀では、今でも伝統的な行法を守っている。この行法は神仏の呼び寄せだとされ、先達は長老がごとめる〔「富里の民俗」〕。

7は、天明三年(一七八三)に「駿河国富士山池谷佐源太」が「三州設楽郡山内村門原」(豊根村三沢)へ伝えたもので〔「富士講の研究」〕、榊原若太夫が書き留めたものである。延命地藏大菩薩、阿弥陀如来、観世音菩薩、釈迦牟尼如来、弥勒菩薩、薬師如来、文殊菩薩、宝生如来の八葉嶽、中宮胎蔵界大日如来等の山内の本地、物忌の期間と精進潔斎を記しており、この中には懺悔の文は認められない。

伊勢湾岸の漁村である土路の富士講は、十二年目の申年ごとに富士参りを行ってきた〔堀内「霊峰富士」〕。先達は、二巻の巻物を書き写し、出発時に模造の富士山〔「蓬莱山」という〕の上で読み上げて御山(富士山)へも携帯する。古くは節をつけて唱えていた。9は富士山縁起そ

のものである。8は、祝詞の形式をとる。ここでは、「浅玉ヤ…」の歌を最初に掲げ、富士山縁起、一嶽から八嶽までの神と本地仏、山内施設の神仏を読み上げる。また、同所の道中歌の資料には、同行唄(道中歌)を日の丸の扇に記したものが、それを冊子にした10がある。

南勢方面では、大王町、南勢町(南伊勢町)、南島町(同上)に残される。大王町波切の「せんげんさんの唱え」は懺悔の文で、別に「秋葉山の唱え」がある。南勢町切原の「浅間大菩薩御行事」は、般若心経から始まり、「なーむうさまんだー…」の真言、「南無婦命頂礼さんげさんげ…」の懺悔の文、「のうまくさんまんだ…」の真言、「お山の歌」からなる一枚刷りのものである。浅間さんの祭りに、浅間山の山頂にあるお大日ツァン(浅間小祠)の前で、講元の先唱で唱和し、これに続けてお鉢めぐりと称して、「お山の歌」を歌いながら祠の周りを巡回する。これらの行事用に昭和四十九年七月に印刷したものを配布している。五ヶ所浦山方のものは懺悔の文で、ビニールのカバーが掛けてあり、「垢離」での使用が推測される。宿浦(南勢町)では、地内の浅間さん小祠に昭和六十一年「奉納 村中安全海上安全」と年未詳の「大日如来お勤め」が掲げられている。「お勤め」は懺悔の文と浅間・薬師の真言からなっている。隣接する田曾浦には、「昭和三十一年申年登山 山本吉五郎」が奉納した「浅間神社おつとめ」と別の「浅間神社おつとめ」(同年)が、田曾浦の浅間さんに掲げられる。懺悔の文と、大日・薬師の真言からなっている。ここにも富士参りの「道中歌」が残されている。

南島町方座浦では、四月山部(懺悔の文)、第二部(大日真言)、五月山部(懺悔の文)、第二部(以下同じ)、大日真言、七月山部(懺悔の文)、第二部(以下同じ)、大日真言)からなる「浅間講」の一枚刷りを用いている。これとは別に、「浅間祭の唄」(道中歌)の一枚刷りがある。この地域では、懺悔の文やオットメ(真言)が確認されるのみで、八葉嶽に対応する部分は見当たらない。

滋賀県甲賀郡甲南町（甲賀市）の稗谷に富士信仰の作法書がある。11は、大水戸川の水を堰きとめて宮守が行う富士垢離（富士ゴモリという）の方法を記したもので、川の流れの設え方や行事の手順、祝詞の唱え方について順を追って記述している。現在、七月の土用三日の日に富士ゴモリを行って、この内容を唱えている。役行者と木花咲耶姫命を拝み、身を清める「稗谷の民俗」。このような富士垢離は、南山城の切山（京都府笠置町）にも存在し、寒中の寒垢離と夏の土用になされる土用垢離に、「キミヨウチヨウライ サンゲーサンゲー ロッコンシヨウジヨウ オオムネ ハツダイ コンゴウドー フージハセンゲン ダイニチ ニョーライ」の懺悔の文を唱える〔志村博「京都府笠置町に伝わる『富士垢離』について』『館報』平成十一年度、富士市立博物館、二〇〇〇年〕。祭文やオノット（祝詞）は、地域で行うオコリ等の講行事に用いられるもので、富士山八葉の内証を奏上する。水垢離を伴っている場合には、そこで懺悔の文を唱える形をとる。オットメ（真言）は、八葉嶽の浅間大菩薩・大日（表大日）と薬師（裏薬師）に対応している。

資料については、大島建彦氏、松田香代子氏にご教示をいただき、資料化については菊池邦彦氏に協力を賜った。

目次

- 1 (年未詳)
さんげのもん(懺悔文)
富士垢離
〔静岡県富士宮市村山〕
- 2 (年未詳)
奉唱富士山
〔静岡県掛川市千羽〕
- 3 天保四年(一八三三) 六月吉日
大峰山富士山御山渡り(祝詞)
〔静岡県袋井市浅羽町浅名〕
- 4 天保八年(一八三七) 三月吉日
大峰山富士山御祝詞帳
〔静岡県磐田市大原〕
- 5 明治三十年(一八九七) 九月
富士山御勤
〔静岡県磐田市豊田富里〕
- 6 (年未詳)
富士山祝詞乃大事
〔愛知県北設楽郡豊根村三沢山内〕
- 7 天明三年(一七八三) 正月吉日
(富士山祝詞)
〔三重県伊勢市東豊浜町土路〕
- 8 平成四年(一九九二) 七月
富士蓬萊山由来
〔同右 土路〕
- 9 平成四年(一九九二) 七月
富士講道行唄
〔同右 土路〕
- 10 平成十六年(二〇〇四) 六月吉日
富士垢離祭り方次第
〔滋賀県甲賀市甲南町裨谷〕
- 11 大正十三年(一九二四) 七月二十四日

1 さんげのもん(懺悔文)

(年未詳)

刑部ぎょうぶの 大日だいにち 大龍権現だいうりゅうこんげん

婦命頂禮きみよちやうらい 南無浅間なむせんげん 大菩薩だいぼさつ

(菊川市 段平尾区有文書)

3 奉唱富士山

天保四年(一八三三) 六月吉日

(表紙(縦)

天保四年
奉 唱
富 士 山
巳六月吉日
榛葉氏

さんげのもん
 (懺悔懺悔) (六根清浄)
 さんぎさんげ、ろつこんせうぜう、
 (御注連に八大) (金剛童子)
 おしめにはつだい、こんごうとうじ、
 (富士は浅間) (如来)
 ふじはせんげん、大日によらい、
 (礼拝)
 (二) (礼拝)
 (南無浅間大菩薩)
 なむせんげん大ぼさつ。
 (唱う)
 これは八度とのうべし。

富士山村山

別当

惣役人

2 富士垢離

(「富士の歴史」富士の研究I)

(年未詳)

富士垢離

懺悔さんげ 懺悔さんげ 六根清浄ろくこんしょうじやう

御メおしめに 八大金剛童子はつだいこんごうどうじ

(表紙裏貼紙)

「月の見こと三者こんごうしほさつ、ひやうふが岩二者とふこん神、
 (黒岩) (毘沙門)
 くら岩三者びじやもん天王」

富士山表口禅淳開山神変大菩薩、惣本尊浅間大菩薩、
 (兩部) 両府大日如来

壹千式百余尊、
 (絶頂胎藏八葉曼荼羅)
 懺悔懺悔、
 (清浄)
 さんぎさんげ、六根せうく、
 (御注連) (八大金剛童子)
 おしめ二初たいこんごうとうじ
 (富士) (一) (礼拝)
 ふし浅間大日如来、壹しゆ来ます

壹之嶽ニハ 天照皇大神宮本地延命地藏大菩薩
 (阿弥陀)

式嶽三者 熊野三所大権現本地あミた如来

三ノ嶽ニ者 伊豆大権現本地たいせいくわんせ音菩薩 (観世音)

四ノ嶽ニ者 白山明利大権現本地釈迦無尼如来 (弥勒菩薩)

五ノ嶽ニ者 「日吉」鹿嶋山王大権現本地みろくほさつ (弥勒菩薩)

六ノ嶽ニ者 鹿嶋大明神本地やくし如来 (薬師)

七ノ嶽ニ者 箱根大権現本地文殊菩薩

八ノ嶽ニ者 三嶋大明神本地宝勝如来

(中宮)
中くふ内院両府大日如来

山の四方者次第明神

みいけにくりから不動明王 (俱利伽羅)

みはしにふげんせいしほさつ (普賢・勢至菩薩)

はとむねあいせん明王 (鳩胸) (愛染)

物見たけニ者まりしてん王 (嶽) (摩利支天)

ねいしに三宝大こう神 (荒神)

砂ふるいにハうすさん明王 (振) (烏枢沙摩)

ふしゆうがたけニ者十六善神 (不浄嶽)

ねいしに三方大こふしん

砂ふるいにハうつさん明おう

ふしゆうたけ者十六善神 (御室)

みむろニ五所大権現こたい力菩薩 (五大力)

滝ノ本の岩家ニ者不動明王 (や)

龍が場々ニ者八大龍王弁済天女 (馬場) (財)

こおふしニ者五字の如来 (智)

中くふ八幡大菩薩 (中宮)

ほつしん門ニ者文殊菩薩 (発心)

とふがく門ニ者あしく如来 (等覚) (阿闍)

明がく門ニ者こくふ蔵菩薩 (妙覚) (虚空)

(鳥居)
鳥井八日光月光

奥野院根本村山浅間大菩薩

七社十九神

富士山惣珍じゆ大頭龍大権現 (鎮守) (大棟梁)

本宮大宮浅間大菩薩

新宮駿府浅間大菩薩

吉田ノ浅間大菩薩 (須山)

「式」す山の浅間大菩薩 (異筆) (須走)

「巻」すはしりせんけん大ほさつ (御手洗)

みたらしニ者日光燈明仏 (南無大小鎮守)

なむ大しやう珍じゆ (関東の鎮守)

なむくわんとうの珍じゆ (祇)

なむ日本大小の神義

なむ当国当所の珍じゆ

さんぎさんげ六根せうじやう (御注連) (八大金剛童子)

おしめニ初たいこんこうとうし

なむこんこうとうし

さんぎさんげ六根じやうしやう

おしめニ初たいこんこうどふじ

大山大小不動明王、 (右)

南無せき尊大権現大天狗小天狗

あいみんのふじゆぢゆ来ます

是ハ三度か七度ハ廿壹度可唱事

〔静岡県史〕資料編15 近世七)

4 大峰山富士山御山渡り(祝詞)

天保八年(一八三七)三月吉日

(表紙)

天保八年
大峰山
富士山
御山渡り
西三月吉日
松下邑郷中

南無 日天師月天師^(子)
 南無 伊勢天照皇両大神宮
 南無 八幡大菩薩
 南無 春日大明神
 南無 津島総社牛頭天王
 南無 尾張八ツるぎあつたの大明神^(剣)^(熱田)
 南無 天竜川子安ニ小国の大明神
 南無 秋葉山三尺坊大権現
 南無 奥院勝坂不動明王
 南無 光明山福一万虚空蔵大菩薩
 南無 山住大権現^(之)
 南無 一野宮一きう大明神^(鎮守)
 南無 当国の物ちんちふ^(垂)
 南無 吉野ニ志て掛大明神
 南無 同所蔵王権現
 南無 勝手大明神

南無 子守三拾八社^(金精)
 南無 今性大明神^(神)
 南無 希怒けの神弁大菩薩^(神変)
 南無 阿い善明王^(愛染)
 南無 大峰八太こんかうとうじ^(金剛童子)
 南無 足摺神弁大菩薩^(理源)
 南無 鳥住ニ正法里げん大師^(洞川八大)
 南無 ところ川初太こんかうとうじ^(弥勒)
 南無 同所味六大菩薩
 南無 金掛神弁大菩薩
 南無 くけつニ蔵王権現^(眼き)
 南無 両のそきの神弁大菩薩^(財)
 南無 天の川ニ弁才天
 南無 とうろう岩屋の神弁大菩薩
 南無 ごま岩神弁大菩薩
 南無 飛石神弁大菩薩^(屏風岩)
 南無 ぎやうぶ石大小不動明王^(袈裟)
 南無 けざ掛ヶ神弁大菩薩
 南無 元結掛ニ蔵王権現
 南無 大峰山上大権現
 南無 山上神弁大菩薩
 南無 稲村三社大権現
 南無 川上地藏大菩薩^(小笹)
 南無 小さの神弁大菩薩^(理源大師)
 南無 正法里げん大士
 南無 ごま大小不動明王
 南無 大黒小天弁財天

南無	大峰の惣鎮守	南無	原川浅間大菩薩
南無	金峰山大権現	南無	小笠原大権現
南無	熊野三社拾式社権現	南無	大頭竜大権現
南無	高野山かうほう大師	南無	法多山観世音
南無	同所ニ四社の大明神	南無	浅羽三社八幡大菩薩
南無	金毘羅大権現	南無	春日大明神
南無	同所ニ大明神	南無	当村当所の氏神
南無	(金剛山)	南無	家内三宝大荒神
南無	(伯耆)	南無	天七星九星式拾八星
南無	こんかうせんニハほうき菩薩	南無	地三拾六きん
南無	(多武峰)	南無	日本国中の大小神儀
南無	(大織冠)	南無	天下太平国土安全
南無	等野峰ニハ大小官大権現		
南無	三輪大明神		
南無	南都春日大明神		
南無	成春大明神		
南無	箕尾ニ神弁大菩薩		
南無	王城の惣鎮守		
南無	越中立山大権現		
南無	加賀ニ白山大権現		
南無	湯殿山大権現		
南無	関東の惣鎮守		
南無	大山大小不動明王		
南無	大山石尊大権現		
南無	大天狗小天狗		
南無	富士ハ浅間大菩薩		
南無	箱根ニ両社の大権現		
南無	三島大明神		
南無	駿府浅間大菩薩		
南無	日坂八幡大菩薩		
南無	関東塩釜六社大明神		
		南無	富士浅間御山渡り
		南無	上ニハほん天たい志やく
		南無	(四大)
		南無	下ニハ志だいの天王
		南無	伊勢天照皇両大神宮
		南無	八幡大菩薩
		南無	春日大明神
		南無	津島総社牛頭天王
		南無	尾張八剣熱田大明神
		南無	秋葉三尺坊大権現
		南無	奥院勝坂不動明王
		南無	市野宮一久大明神
		南無	天竜川子安子玉大明神
		南無	原川浅間大菩薩
		南無	日坂塩釜六社大明神

- 南無 同所八幡大菩薩
- 南無 駿府浅間大菩薩
- 南無 かんはら浅間大菩薩
- 南無 大宮浅間大菩薩
- 南無 村山浅間大菩薩
- 南無 村山七社の大権現
- 南無 仏宝大頭龍大権現
- 南無 横瀬に観世音菩薩
- 南無 中宮八幡大菩薩
- 南無 うし王子弥勒菩薩
- 南無 初大竜王金峰童子
- 南無 さいのかわら二地藏菩薩
- 南無 笹古里浅間大菩薩
- 南無 おむろハ大日大両権現
- 南無 はらくみ大日如来
- 南無 すなふるいうすさハ明王
- 南無 黒岩あい善明王
- 南無 阿なこ屋浅間大菩薩
- 南無 みわしハしん志ゆ観世音
- 南無 けさ掛大日如来
- 南無 一滝 延命地藏菩薩
- 南無 二滝 阿弥陀如来
- 南無 三滝 観世音菩薩
- 南無 四滝 志やかむに如来
- 南無 五滝 えん志ゆ志う里菩薩
- 南無 六滝 薬師瑠璃光如来
- 南無 七滝 七滝

- 南無 八滝 ほう志やう如来
- 南無 中宮本尊大蔵かいの大日如来
- 南無 当村当所氏神
- 南無 家内三宝大荒神
- 南無 日本国中大小神儀
- 南無 天下大平国土安全
- 南無 八葉九尊(智)の如来
- 志ゆりほさつおんせくうやそわか
- 天保八ツのとし

酉三月吉日
真木の氏
写之
末川下郷中

5 大峰山富士山御祝詞帳

(「浅羽町史」民俗編)

明治三十年(二八九七)九月

(表紙)
明治参十年酉九月写之
大峰山 御祝詞帳
富士山
平成丁丑九年九月再写之
監修 田中 恵
宮世話人

高天原仁神留座須皇親神漏岐神漏美乃命以天日向橋乃憶原乃九柱乃神
粟門及名門乃御戸六柱乃神達諸汚穢乎赦賜清賜陪止申事乃由乎
左男鹿乃八乃耳乎振立天間食止申寿

吐普加身依身多女 波羅意玉意清玉有

祝詞 大峰

一爾礼拜婦命頭礼懺悔懺悔六根清淨

大峰初提(八代)金剛童子南無藏王權現不動明王

理源大師南無神變大菩薩

南無 上梵天帝釈

南無 下四大天王

南無 天堂大日如来

南無 月天阿弥陀如来

南無 家内三宝大荒神

南無 当所御氏神

南無 奈良春日大明神

南無 若宮八幡宮

南無 三輪大明神

南無 多武峰大職(織)冠鎌足公

南無 金剛山伯耆菩薩

南無 天川弁財天

南無 吉野子守明神

南無 金精大明神

南無 泥辻不動明王

南無 相善寺大菩薩

南無 吉野幣掛大明神

南無 三社藏王權現

南無 吉水院大菩薩

南無 蝙蝠參拾八社

南無 毛拔燈金正大明神

南無 愛染明王大菩薩

南無 鐘掛行者大菩薩

南無 御龜石大菩薩

南無 西視(視)大菩薩

南無 大石大黒大菩薩

南無 胡磨行者大菩薩

南無 東視大菩薩

南無 蟻戸渡行者大菩薩

南無 行土石不動明王

南無 髮掛行者大菩薩

南無 袈裟掛不動明王

南無 山上行者大菩薩

南無 役行者大菩薩

南無 小笹行者大菩薩

南無 泥川(洞川)八大竜王

南無 住戸地藏菩薩

南無 戸住正法理源大師

南無 御山惣鎮守

南無 伊勢兩社神明宮

南無 三社八幡宮

南無 朝熊山大菩薩

南無 天岩戸天堂大日如来

南無 津町阿弥陀如来

南無	尾張熱田大明神	南無	法多山觀世音
南無	津島日本惣社牛頭天王	南無	原川浅間大菩薩
南無	知立大明神	南無	同所薬師如来
南無	岩谷觀世音	南無	可睡斎三尺坊大権現
南無	鳳来寺峰薬師	南無	油山瑠璃光如来
南無	本宮大権現	南無	小笠山大権現
南無	新井湊大明神	南無	大頭竜大権現
南無	豊川叱枳尼尊天	南無	日坂八幡宮
南無	奥山半僧坊大権現	南無	静岡浅間大菩薩
南無	浜松五社諏訪明神	南無	蒲原浅間大菩薩
南無	鴨江觀世音	南無	<small>(岩測か)</small> 岩倉富士浅間
南無	秋葉山大権現	南無	大宮浅間大菩薩
南無	愛宕山大権現	南無	村山七社大日如来
南無	役行者大菩薩	南無	中尊八幡大菩薩
南無	八幡大菩薩	南無	駒富浅間大菩薩
南無	見付不動明王	南無	砂払浅間大菩薩
南無	同所天神宮	南無	中尊本尊甲斐大日如来
南無	一之宮大明神	南無	<small>(突)</small> 胸月大日如来
南無	光明山大権現	南無	御前腹汲大日如来
南無	奥院摩利支天大権現	南無	雲切不動明王
南無	秋葉寺三尺坊大権現	南無	驗峰地藏菩薩
南無	正一位秋葉神社	南無	賽河原地蔵菩薩
南無	奥院不動明王	南無	御裏薬師如来
南無	山住大権現	南無	須山浅間大菩薩
南無	春埜山大権現	南無	須走浅間大菩薩
南無	鎌田神明宮	南無	吉田浅間大菩薩
南無	浅羽三社八幡宮	南無	古見峰大権現

南無	多良坊大権現	南無	深川八幡宮
南無	一嶽天照皇太神宮	南無	成田山不動明王
南無	二嶽熊野三社大権現	南無	宗吾大明神
南無	三嶽伊豆大権現	南無	日光山東照大権現
南無	四嶽白山大権現	南無	奥州湯殿山大権現
南無	五嶽日吉山大権現	南無	金華山大権現
南無	六嶽鹿島大明神	南無	塩釜六社大明神
南無	七嶽三嶋大明神	南無	春日山大権現
南無	八嶽箱根山大権現	南無	甲斐善光寺如来
南無	御山惣鎮守	南無	信濃御諏訪明神
南無	小田原道了大権現	南無	同所善光寺如来
南無	伊豆御瀬明神	南無	九頭竜大権現
南無	手石阿弥陀如来	南無	戸隠山大権現
南無	江之島弁財天	南無	月山大日如来
南無	鎌倉八幡宮	南無	木曾嶽大権現
南無	大山石尊大権現	南無	越後御五知如来
南無	大天狗小天狗	南無	越中立山大権現
南無	大小不動明王	南無	加賀白山大権現
南無	常陸鹿島薄明神	南無	別山大日如来
南無	同所子之権現	南無	美濃白山大権現
南無	上州妙義山大権現	南無	那智山観世音
南無	桧垣地藏菩薩	南無	御滝元飛竜権現
南無	増上寺阿弥陀如来	南無	大阪天王寺聖徳太子
南無	柴神明宮	南無	西京北野天神宮
南無	愛宕山大権現	南無	愛宕山大権現
南無	浅草観世音	南無	京洛中惣鎮守
南無	神田大明神	南無	備前優賀大権現

南無 四国金毘羅大権現
南無 石鎚山大権現

南無 薩摩住吉大明神

南無 備中吉備大明神

南無 豊前宇佐八幡宮

南無 九州惣鎮守

南無 出雲十二社大権現

南無 伯耆国伯耆菩薩

南無 西国三十三所

南無 秩父三十三所

南無 板東三十四番

南無 四国八十八番

南無 富士浅間大菩薩

南無 役行者神變大菩薩

南無 日本大小ノ神祇

南無 日本大小ノ神祇

ノウマク

サンマンダ

バサランダ

センダ

マカロシーヤダ

ソワタヤ

ウンタラタ

カンマン

6 富士山御勤

(年未詳)

南無日月御燈明 南無見ル女大菩薩 南無天照皇大神宮 南無当所

氏神 南無三宝大皇神 南無当国当所鎮守 南無道端之堂六神

南無水天明王 南無稻荷大明神 南無正一位秋葉三尺坊大権現 南無

光空藏大菩薩 南無智恵万光空藏大菩薩 南無一ノ宮御国大明神

南無八方不動明王 南無志はん坊大権現 南無小笠山三仞大権現

南無阿多古山大菩薩 南無国分寺薬師如来 南無北野天満大自在天神

南無七ッ森稻荷大明神 南無木原之大権現 南無原川浅間大菩薩

南無西方福天大権現 南無正一位大龍頭大権現 南無日阪塩屋の大

権現 南無八幡大菩薩 南無駿河の浅間大菩薩 南無神原浅間大菩薩

南無大宮浅間大菩薩 南無村山七所大通龍大権現 南無中宮八幡大菩

薩 南無牛の王子浅間大菩薩 南無龍方馬場之浅間大菩薩 南無笹

子利浅間大菩薩 南無御無路八大(以下欠損) 南無原(組) 南無

不浄瀧(嶽)の(一) 南無身振浅間大菩薩 南無板取山浅間大菩薩 南無

黒岩浅間大菩薩 南無下之横渡之浅間大菩薩 南無上之横渡之浅間大

菩薩 南無笠不二浅間大菩薩 南無鳩峯浅間大菩薩 南無彦見古浅間

大菩薩 南無三橋浅間大菩薩 南無毛砂掛大日如来 南無阿部大日

如来 南無不動明王 無邏积迦無爾如来 南無門壽大菩薩 南無

普現大菩薩 南無地藏大菩薩 南無身祿大菩薩 南無薬師如来

南無観世音菩薩 南無(勢至)大菩薩 南無阿弥陀如来 南無足久如

来 南無大日如来 南無光空藏大菩薩 南無駒ヶ瀧ノ浅間大菩薩

南無内利の浅間大菩薩 南無八よ子浅間大菩薩 南無吉田浅間大

菩薩 南無須走浅間大菩薩 南無三島ノ大明神 南無箱根ノ大権現

南無江ノ島弁在天 南無大山不動明王 南無関尊大権現 南無

(七回繰返)

〔福田町史〕資料編 民俗

湯どの山大菩薩 南無羽黒山大菩薩 南無月山大菩薩 南無甲斐の
善光寺如来 南無上ノ諏訪大明神 南無下ノ諏訪大明神 南無信濃ノ
善光寺如来 南無戸隠大明神 南無九頭龍三社の大権現 南無越後
ノ五知如来 南無越中立山和合大権現 南無加賀ノ白山妙利大権現
南無出雲ノ大社 南無西国金毘羅山大権現 南無阿内ニ金剛山方き大
菩薩 南無京ニ阿多古山大権現 南無近江御多賀大明神 南無大峯
行者大菩薩 南無山上大権現 南無泥川八大龍王々々 南無不動明王
南無津島牛頭天王 南無熱田ノ大明神 南無豊川稻荷大明神 南無鳳
来寺峯薬師如来 南無麻利支天大権現 南無西国三拾三所観世音菩薩
南無日本国中大小ノ神祇 南無浅間大菩薩 終り

〔豊田町誌〕別編Ⅱ 民俗文化史

7 富士山祝詞乃大事

天明三年（一七八三）正月吉日

富士山祝詞乃大事
（掛巻母）かたくもかたじけなくも 富士せんげん大菩薩（理気）りきの大ゆかに
（恐れ慎んで）おそれつしんで申奉 此山と申は日本ひらさきはじまりより（金輪）
（湧出）んさいよりわきいで 天神力の神代より（人皇）のう六代かんたちの御世
（霧雲に隠れ人に見へ給わらず）よまで きりくもにかくれひとにみへたまわす（天地初）の如来
（金剛界）こんがうかいの大日 つつひて八代そんすまませたまふをんやまなり（御山也）
御山のいただきわたいぞうかい（胎藏界）はちようのまんだらたけことにつみ（阿弥陀）
たまふ いちのたけはえんめいぢぞうだいぼさつ（八葉曼荼羅）二のたけはあみだ
如来 三のたけはくわんぜおんぼさつ（観世音菩薩）四の竹はしやかむに如来（業師）
五の竹はみろく菩薩 六のたけはやくし如来（中宮）七の竹は文殊菩薩
八の竹はほうしやうによらい ちゆう宮の本尊たいぞうかいの大日

（如来）によらい（四方）（四大明王）（俱利伽羅不動）
（御注連は八大）（童子）みあしはふけんぼさつ（鳩胸）はあいぜ
（明王）んめう王 物見かたけにはひろみこ八金剛しほさつ（屏風岩）
（字御子）は見るめのうがじん 黒ゆわにはびしやもん天王 三宝荒神 すのう
（烏板沙摩）るいにはうすさま明王（不浄ヶ岳）
（龍ヶ馬場）う大りきぼさつ（龍ヶ馬場）ふじやうが竹には拾六善神（龍）むろは五しゆが
（阿弥陀）宮）うぐうはあみだ如来（発心門）はつしんもんにはりゆうしほさつ（めやうかく
（虚空蔵菩薩）もんにはこくぞうぼさつ（鳥居は日光月光 奥の院にはほんたい村山
（富士）ふじ権現すいじやく（社）六しやの明神（御手洗）（面）ただい
（沙門）ましやもん（某）がしが手にとる五へいのさきに（山里）をののこらず
（浅玉）さつさとのりうつりたまふ（且那）あさたまや御山ざとの神ばに（垂）
（且那）をかけるまもなし 大だんなあるは百日 あるは七拾五日 あるわ五
十日 あるわ三七日なり 七日を以つて、（清浄水）せいしやうすいにてかうへ
（別火）をさらし 善悪むくしんのしやうじんけつさいして（禁則）ふしゆほんせい
このべつ火にいり（清浄精進）せいじやうしやうじんのきんそくを（丹精の志）まつたく山
（参詣）のさんけいしたまう（且那）だんなのみにたんせい（南無富士せん）
（大菩薩）間大菩薩）だいじいけんぞく（末社迄）まつしやまでも（眼）小金のまなこを（見）
（開）ひらき（鹿）さを鹿の八つの御みこふりたつて（納受）のうじゆをたれたまい
（苞）一座のためのつとうささげたてまつる（南無本願発心）なむほんがほんしん大日如来
（富士浅間大菩薩）ぢげんふじせんけん大ぼさつ あいみんのうじゆあいみん且那
（謹請）ばいそういぞうし惣らくぢざい五へいに（敬って）さらさらかうべにより
（再拜再拜）あらさんじやう（再拜再拜）さいはいさいはいと（敬って）うやまつて申奉る 隠急如律令
（駿河）する河国富士山 池谷佐源太ヨリ三州設楽郡山内村門原え伝ル

天明三癸卯正月吉日

榊原若太夫 書之

〔岩科小一郎「富士講の歴史」〕

8 富士山祝詞

平成四年（一九九二）七月

謹請再拜々々諸ノ不淨祓給清給

浅玉ヤ奥山里ノ榊葉ハ心ニシテフ懸ス間モナシ

日ノ本伊勢ノ国伊勢市高羽江郷土路富士講信徒五拾有餘名某等

掛麻久母畏キ富士浅間大菩薩ノ大前ニ慎ミ敬イ恐ミ恐ミモ白サク、

抑此御山ハ萬国無比ノ靈山ニシテ一ニ富貴延命ノ蓬萊山ト称シ奉ル、

上古ハ深ク霧雲ニ藏シテ見サセ給ハス、伏而惟レバ如来金剛界大日壹佰

八拾尊鎮座在御山也、頂上ハ胎藏界八葉ノ曼陀羅ニシテ嶽コトニ諸神

諸仏鎮座在、第一ノ嶽ハ延命地藏願王大菩薩、第二ノ岳ハ阿弥陀如来、

第三ノ嶽ハ觀世音菩薩、第四ノ岳ハ釈迦牟尼如来、第五ノ岳ハ弥勒菩薩、

第六ノ岳ハ東方藥師如来、第七ノ岳ハ文殊菩薩、第八ノ岳ハ宝勝如来、

中央胎藏界大日如来、御山四方ニハ四大天王、右座ハ不動明王、左座ハ

八大金剛童子、普賢・勢至ニ菩薩、愛染明王、物見ノ岳ハ宇賀神王、

黒岩毘沙門天王・三宝大荒神、不淨ガ岳ハ拾六善神、室ガ岳ハ大力菩薩、

龍ガ馬場ハ大辨財尊天、八大龍王、中宮ハ八幡ノ神社、發心門ハ

龍樹菩薩、等覺門ハ阿闍如来、妙覺門ハ虚空藏菩薩、涅槃門ハ

日光・月光両菩薩、奥ノ院ハ本地浅間大菩薩、六箇所跡ヲ垂レ給、

南無浅間大菩薩、仰冀行者捧奉ル御幣ニキリクサ、グト乗移リ給ヒ、

伏願国家安寧・五穀豊登・萬民和楽・災難消除、専祈奉ル、

行者五拾有餘名ノ者、福寿延長・登山安全・諸願圓滿成サシメ給エト、

再拜々々敬ミ恐ミ恐ミ慎テ白ス、

平成四年七月

（土路富士講文書）

9 富士蓬萊山由来

平成四年（一九九二）七月

富士蓬萊山由来

抑恋ノ山目出度參詣、駿河ナル富士蓬萊山ノ由来ヲ謹テ委ク尋ネ奉ルニ、
 人皇六代孝安天皇ノ御宇、近江国一夜ノ内ニ水湛エ、其土駿河ト甲斐堺
 ニ湧出テ、同七代孝靈天皇御宇、天ヨリ盤石降り下リ、空中ヨリ峰トナ
 リ、新ニ此ノ御山ト成リ給フ、偕唐土秦ノ徐福ト謂ル人数多ノ男女ヲ召
 シ連レ、不老不死ノ藥ヲ尋ネ来テ此御山ニ入ルト言リ、夫ヨリ富貴延命
 ノ蓬萊山ト申テ参国一ノ名山ナリ、是レ則富士浅間本地新ニ鎮座在シテ
 末世ノ衆生ヲ救ヒ給ゾ有難シ、偕テ無間ヶ谷・劍ヶ峰各々威靈ニ在セバ
 賞罰新タナルトカヤ、藥師ヶ嶽ハ拾式願ヲ表シテ其ノ名号貴キコト一度
 耳ニ触レ身心安樂シテ諸ノ病苦ヲ救ヒ給フ、阿弥陀ヶ岳四拾八願ヲ表ト
 シ、安養世界ニ導キ給、觀音岳ハ生死長夜ノ暗ヲ照シ給フ、勢至ヶ岳ハ
 是レ皆ナ出世本懐其峰ニアリ、大日不動ハ一心ニ阿字本体不生不滅ト示
 シ、諸行無常ノ四句ノ文夜又ニ授ケ給フ、釈迦ヶ岳四拾九年參佰余会ノ
 説法モ末後壹字不説ト翻転シ、浅間大明神木花之佐久夜比売本地大日如
 来コソ参国ニ曇リナシ、昔此秋津洲ノ国未ダナカリシ時、大海底ニ大日
 ノ印文アリ、其滴リ国ト成トカヤ、一度參詣ノ輩ハ拾悪五逆ノ罪ヲ滅シ、
 富貴延命ニ守ラセントノ御誓ナリ、然ルニ昔此ノ御山ニ道ナクシテ凡人
 行レ得難キ所、人皇參拾七代齊明天皇御宇、白雉拾壹庚申六月七日役行
 者始テ踏分ケ伊豆ノ大島ヨリ、夜ハ此ノ御山ニ通ヒ給フ、偕又村山口ハ
 南無宝勝如来、軍陀利夜又明王ト踏分ケ、須走口ハ阿闍如来、降三世明
 王ト踏分ケ、須浜口ハ弥陀如来、大威徳明王ト踏分ケ、甲州口ハ微妙生
 如来、金剛夜又明王ト明ケサセ給フ、是則行者越トハ申ナリ、弥々信心
 ノ輩ハ中ニモ八葉ノ劍ヶ峰ニテ新ニ參尊ノ御来光ヲ拜シサセ給フ、有難

キ有難シ、現世ニテハ富貴延命諸ノ災難ヲ遁レ、一切願望悉皆成就シ、
当来シテハ八葉蓮台ニ座シ、無為ノ快樂ヲ得シ事疑ヒナシ、神トナリ仏
トナリ、本略不二誠ニ天地和合金胎両部ノ御靈山新ニ御利生給ワリテ引
上ケ給エ、

南無富士浅間大菩薩

敬白

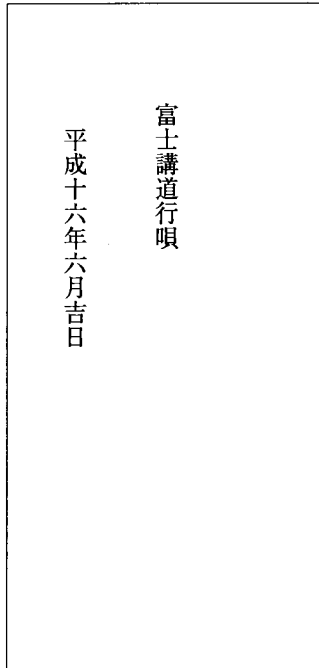
平成四年七月

(土路富士講文書)

10 富士講道行唄

平成十六年(二〇〇四)六月吉日

(表紙)



富士講道行唄

平成十六年六月吉日

富士講道行唄

五月二十三日

土路浅間さんに於いて

五月三十一日

富士 浅間

(真言) 真号「おんまか、きやろにきや、そわか」

一、ありがたやー ありがたやー ハイヤー

めでと げこして またまいろー ハイヤー
またまいろ

踊り方

三步進んで、二歩下がり、輪の中心に向きを変え、
右足二回上げ、そのつど 拍手二回、

進行方向にむかって、手がお山の形を一回、

(手は上から下へかぶせる)

拍手一回、

富士講道行唄

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイイ

一、やがて おふじに ノオ たつほどにな

ア ソラセ ソラセ

いざや ひとびとこーりをかけ

シヨーガイーノ

ヤレノーオ こりをかけ

いざや ひとびとこーりをかけ

シヨーガイーノ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイイ

二、両宮 さんけい ノオ うちすぎてな

ア ソラセ ソラセ

たけへ まいるはあーりがたや

シヨーガイーノ

ヤレノーオ ありがたや

たけへ まいるはあーりがたや

シヨ一ガイ一ノ

ハ一エ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ
三、あさま やまから おふじをみればな

ア ソラセ ソラセ

ふじの おやまにゆ一きもなや

シヨ一ガイ一ノ

ヤレノ一オ ゆきもなや

ふじの おやまにゆ一きもなや

シヨ一ガイ一ノ

ハ一エ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ

四、そよと ふいたが みなみのかげがな

ア ソラセ ソラセ

よしだ みなとへそ一よそよと

シヨ一ガイ一ノ

ヤレノ一オ そよそよと

よしだ みなとへそ一よそよと

シヨ一ガイ一ノ

ハ一エ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ

五、いそぐ よしだを ノオ はやたちてな

ア ソラセ ソラセ

川は なけれどもふ一たがわへ

シヨ一ガイ一ノ

ヤレノ一オ ふたがわへ

川は なけれどもふ一たがわへ

シヨ一ガイ一ノ

ハ一エ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ
六、ここは あらいの ノオ しゆくでそよな

ア ソラセ ソラセ

わたし うちのりま一いさかへ

シヨ一ガイ一ノ

ヤレノ一オ まいさかへ

わたし うちのりま一いさかへ

シヨ一ガイ一ノ

ハ一エ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ

七、おとに きこえし ノオ はままつはな

ア ソラセ ソラセ

われは またねど天一りゆうがわ

シヨ一ガイ一ノ

ヤレノ一オ 天りゆう川

われは またねど天一りゆうがわ

シヨ一ガイ一ノ

ハ一エ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ

八、ここは 見付けの ノオ しゆくでそよな

ア ソラセ ソラセ

いそぐ ところはか一けがわへ

シヨ一ガイ一ノ

ヤレノ一オ かけ川へ

いそぐ ところはか一けがわへ

シヨールガイーノ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイイイ

九、ここは にいさか かなやをこえてな

ア ソラセ ソラセ

おおいがわ にはみーずもなや

シヨールガイーノ

ヤレノーオ みずもなや

おおいがわ にはみーずもなや

シヨールガイーノ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイイイ

十、しまだ ふじえだ ノオ うちすぎてな

ア ソラセ ソラセ

さきは おかべのしゅーくでそよ

シヨールガイーノ

ヤレノーオ しゅくでそよ

さきは おかべのしゅーくでそよ

シヨールガイーノ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイイイ

十一、けあげまりこを ノオ うちすぎてな

ア ソラセ ソラセ

はやく するがのふーちゅにつく

シヨールガイーノ

ヤレノーオ ふちゅうにつく

はやく するがのふーちゅにつく

シヨールガイーノ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイイイ

十二、ねがい ねごたら ノオ はやかのたな

ア ソラセ ソラセ

いまは するがのふーじせんげん

シヨールガイーノ

ヤレノーオ 富士浅間

いまは するがのふーじせんげん

シヨールガイーノ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイイイ

十三、江尻 せいけん ノオ うちすぎてな

ア ソラセ ソラセ

由比の かんばらふーじがわへ

シヨールガイーノ

ヤレノーオ ふじがわへ

由比の かんばらふーじがわへ

シヨールガイーノ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイイイ

十四、とうに ほどなく 岩本すぎてな

ア ソラセ ソラセ

めいしよ おおみやこーりをかけ

シヨールガイーノ

ヤレノーオ こりをかけ

めいしよ おおみやこーりをかけ

シヨীগアイノ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイイイ
十五、われが 同行に しるしがござな

ア ソラセ ソラセ

しろい ゆかたにけーさかけて

シヨীগアイノ

ヤレノーオ けさかけて

しろい ゆかたにけーさかけて

シヨীগアイノ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイイイ

十六、ねがい ねごたら ひよりもかたな

ア ソラセ ソラセ

おむろ ずまいもすぐとおり

シヨীগアイノ

ヤレノーオ すぐとおり

おむろ ずまいもすぐとおり

シヨীগアイノ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイイイ

十七、八丈 まわらぬ ノオ そのうちにな

ア ソラセ ソラセ

おがみ もうそやごーらいこう

シヨীগアイノ

ヤレノーオ ごらいこう

おがみ もうそやごーらいこう

シヨীগアイノ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイイイ
十八、ふじの おやまで ひるねをしたらな

ア ソラセ ソラセ

八丈 まわりのゆーめをみた

シヨীগアイノ

ヤレノーオ ゆめをみた

八丈 まわりのゆーめをみた

シヨীগアイノ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイイイ

十九、八丈 まわりて すなおりおりてな

ア ソラセ ソラセ

おりた ところはあーりがたや

シヨীগアイノ

ヤレノーオ ありがたや

おりた ところはあーりがたや

シヨীগアイノ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイイイ

二十、にしが くもれば ノオ 雨となるな

ア ソラセ ソラセ

ひがし ひでりでやーまよかれ

シヨীগアイノ

ヤレノーオ やまよかれ

ひがし ひでりでやーまよかれ

シヨ一ガイ一ノ

ハ一エ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ

二十一、野でも 山でも ノオ かねがふるな

ア ソラセ ソラセ

うちは しらげのよ一ねがふる

シヨ一ガイ一ノ

ヤレノ一オ よねがふる

うちは しらげのよ一ねがふる

シヨ一ガイ一ノ

ハ一エ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ

二十二、吉田 通れば 二階からまねくな

ア ソラセ ソラセ

しかも かのこのふ一りそで

シヨ一ガイ一ノ

ヤレノ一オ ふりそで

しかも かのこのふ一りそで

シヨ一ガイ一ノ

ハ一エ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ

二十三、そよと ふいたが ならいの風がな

ア ソラセ ソラセ

おいせ みなとへそ一よそよと

シヨ一ガイ一ノ

ヤレノ一オ そよそよと

おいせ みなとへそ一よそよと

シヨ一ガイ一ノ

ハ一エ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ

二十四、お山 よいとこ ノオ 舟がきたな

ア ソラセ ソラセ

ばアさん でてみよま一ごつれて

シヨ一ガイ一ノ

ヤレノ一オ まごつれて

ばアさん でてみよま一ごつれて

シヨ一ガイ一ノ

ハ一エ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ

二十五、まいり よかた ノオ げこよかたな

ア ソラセ ソラセ

とまり どまりのや一どよかた

シヨ一ガイ一ノ

ヤレノ一オ やどよかた

とまり どまりのや一どよかた

シヨ一ガイ一ノ

ハ一エ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ

二十六、せんのお山も ノオ よかたそなな

ア ソラセ ソラセ

こんどの お山もな一およかた

シヨ一ガイ一ノ

ヤレノ一オ なおよかた

こんどの お山もな一およかた

シヨ一ガイ一ノ

ハ一エ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ

二十七、おふじ みやげに ノオ なにもろたな

ア ソラセ ソラセ

しゃくし もろたらふ一だそえて

シヨ一ガイ一ノ

ヤレノ一オ ふだそえて

しゃくし もろたらふ一だそえて

シヨ一ガイ一ノ

ハ一エ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ エ一イ一イ

二十八、祝い めでたの 若松さまはな

ア ソラセ ソラセ

枝も さかえる葉一もしげる

シヨ一ガイ一ノ

ヤレノ一オ 葉もしげる

枝も さかえる葉一もしげる

シヨ一ガイ一ノ

(土路富士講文書)

11 富士垢離祭り方次第

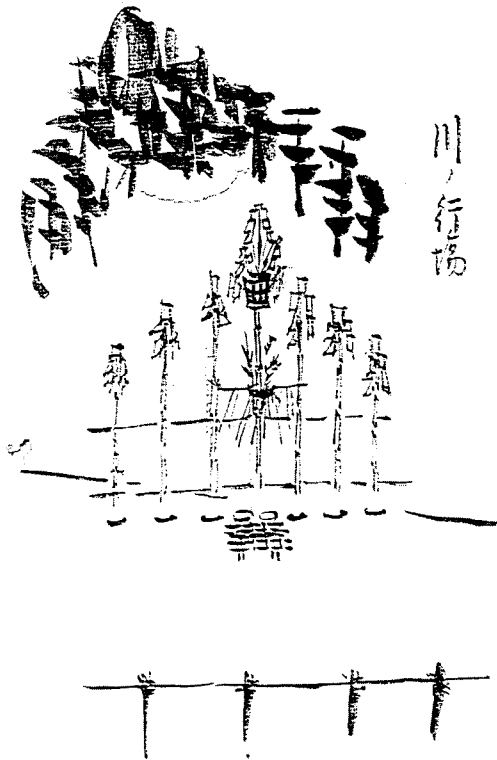
大正十三年（一九二四）七月二十四日

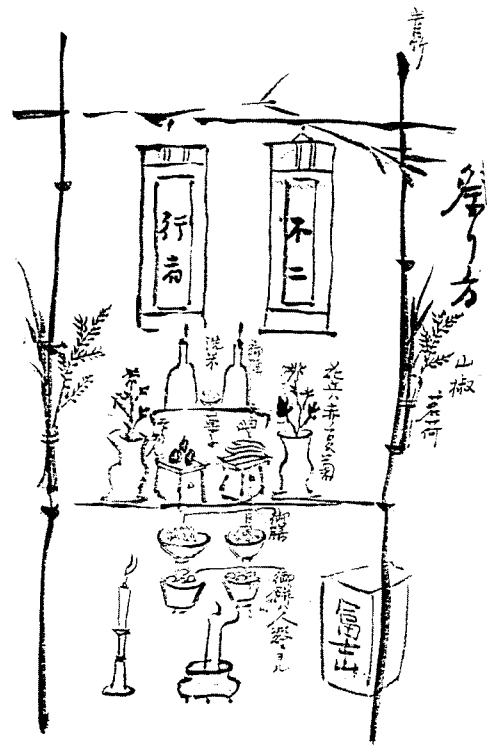
(表紙)

大正十三年甲子年七月廿四日記す

富士垢離祭り方次第

下の髻
印





唱へ方

般若心経

三回

婦命頂礼懺悔く六根清浄

大四明仁八大金剛童子

富士波浅間権現大日如来、

南無浅間権現大菩薩

八回

婦命頂礼懺悔く六根清浄

大峯八大金剛童子、一二礼拝

〔南無行者大菩薩〕

〔八回〕

南無薬師瑠璃光如来

南無地藏大菩薩

南無観世音菩薩

南無元山慈恵大師

八回

不二のお山へ登れる人は、足も軽からお山もよからう、

天上八丁くお幣納のとき及帰りにいなばの坂の上にて口唱したり

此時氏神日枝稻荷両社及小宮五社並二薬師瑠璃光如来へ

御供物を為すことの協議ありたり

大正十三年七月廿三日午後二時頃より雷鳴を催し驟雨あり、

雨量一寸五分、

六月十二日以来降雨なきため雨乞に雨乞を重ねて困難の折柄、

村民の喜悦一方ならざる状況にして、廿五日雨喜ひの籠を為すと

昭和拾五年富士□改正

一従来ハ信徒ヲ以テ土用入ノ日ヨリ五日間執行セシモ、

日支事変ニ付村中協議ノ上、左ノ通り変行ス

一神棚之祭り方ハ従前之通り

一村中土用三朗ノ日弁当持チニテ正午ヨリ安楽寺ニテ執行ス

一神主ハ前日ニ買物及ビイデア立テ竹切りヲナスコト

一神主当日ハ早朝ヨリ祭り方終リ行水一廻勤メ、

昼上下附キニテ村中供ニ弁当ヲ食シ、四時頃行水ヲ勤メ、

帰リニ御供水ヲ持チ帰リ、一般ニ戴クコト

六時頃村中共ニ夕勤メヲ唱ヘテ一般開参シ、

神主ハ神棚ヲ下シ、祭り道具ヲ修メルコト

昭和拾五年七月二十二日夜記ス

富士垢離什物控

一富士山掛図

巻幅

一行者掛図

巻幅

一神酒徳利

巻対

一富士山茶碗	貳個	
一大峯山茶碗	貳個	
一花瓶	貳個	
一神燈	壹個	
一仙香立	壹個	
一蠟燭立	壹個	
一丸膳	貳拾膳	
一講箱	壹個	
一右始末箱	貳個	
昭和八年七月廿四日		
南無淺間權現大菩薩		
南無行者大菩薩		
唱へ方		
先開經偈		
無上甚深微妙法 百千万却難遭遇		
我今見聞得受持 願解如來真実義		
以般若心經	三回	
以啓白		
婦命頂礼懺悔く六根清浄		
大四明仁八大金剛童子		
富士八浅間權現大日如來		
南無淺間權現大菩薩	八回	
婦命頂礼懺悔く六根清浄		
大峯八大金剛童子		
一二礼拜南無行者大菩薩	八回	
南無藥師瑠璃光如來	八回	

南無地藏大菩薩 八回
南無觀世音菩薩 八回
南無元三慈惠大師 八回
次法華成仏偈
願以此功德 普及於一切
我等与衆生 皆共成仏道

(富士吉田歴史民俗資料館、国立歴史民俗博物館共同研究員)
(二〇〇七年九月十四日受理、二〇〇八年二月二十八日審査終了)

(稗谷区有文書)